

設問のタイプの相違が日本語学習者の文章理解に及ぼす影響

山田 裕美子

1. 研究の背景と目的

本論文は、文章を読む際の理解の足がかりとなる設問について、その種類に焦点を当て、種類の異なる設問によって中級日本語学習者の理解にどのような特徴がみられるかを読解中の処理過程と最終的な理解の2点について明らかにすることを目的とした研究である。

設問が読み手の理解の促進に効果を持つことは従来の研究でも明らかにされている。設問が持つ役割は、文章を読む際に何に注意して読んだらいいかという選択的注意を活性化させる働きがあること、理解できているか否か設問を読むことによって再考させるモニタリングの機能があることである。しかしながら、先行研究ではどのような設問が理解の促進になるのかという設問の種類について具体的に検証したものは、特に日本語教育の分野ではごく僅かしかない。

異なる種類の設問の効果について検証した従来の研究の多くは、設問の種類を文章中の事実情報を問うもの、文章中には答えが明示されてない推論を要するものという2種類の比較から検討するものであり、推論質問の方が効果があるという立場や、設問の種類の違いは理解に影響しないという立場など、一貫した結論は得られていない。また、それらの研究は、読解後の理解確認質問の結果や筆記再生したデータの分析による検証であり、種類の異なる設問を与えられた際に学習者が読解中にどのような処理過程を経るのかは明らかになっていない。さらに、扱われている設問の種類も、事実質問か推論質問かという二極化されたものであり、設問解答の際に求められる情報統合の範囲といった点は加味されていない。

そこで、本論文では情報統合の範囲、明示性という2点から設問を設定した。それらは、段落内の情報を統合することで解答できる局所的な設問（Aタイプ）、段落を超えた広い範囲の情報を統合することで解答できるが、答えとなる選択肢は表現を変えてある設問（Bタイプ）、文章全体に関わる情報を統合することで解答できる大局的な設問（Cタイプ）の3つのタイプである。これら種類の異なる3つの設問を与えられることにより、読み手が構築する理解にどのような特徴がみられるのかを文章を読んだ後に作られる結果的な理解と、

読解中の処理過程に起きる過程的な理解について検証した。

2. 研究方法

東京都内に在籍する中級レベルの日本学校生、大学に在籍する留学生 20 名に対し、説明文 2 種類に異なるタイプの設問を割り当て、設問を先に読んだ後に発話思考による読解、設問解答、母語による筆記再生課題、インタビューという手順で調査を行った。発話は全て文字起こしを行い、プロトコルデータを作成した後、発話の機能から 20 種類の下位ストラテジー、3 種類の上位ストラテジーに分類した。筆記再生データはアイデア・ユニットに分割したものを分析データとした。プロトコルデータは、読解中の過程的な理解を分析する対象として、筆記データは、読んだ後の結果的な理解を分析する対象として使用した。

3. 研究の成果

第 4 章と第 5 章では、文章を読んだ後の最終的な理解について、設問の影響がどのように及ぶかを検証した。

第 4 章では、筆記再生データを分析した結果、どの設問タイプにおいても同程度の量が再生されていたことから、設問タイプの違いによって理解される量には影響を受けないことがわかった。しかしながら、何を理解していたかという内容は、設問で問われている内容に偏っており、情報の統合という設問タイプの違いよりも内容に影響されていた。設問を先に読むことにより、何に注意して読めばよいかは明確となり、問われていた内容を中心に理解が進んだ結果だと思われる。一方、設問で問われていた内容に限らず、文章の要点となる情報や重要情報は設問タイプが異なっても共通して理解にあらわれており、設問というものの影響を受けずとも理解が進む側面も示していた。

第 5 章では、筆記再生データに対して、日本語教育経験者による評価を行い、文章が正しく理解できているかを判定した。評価基準は、「要点」、「背景」、「整合性」の 3 つの観点とし測定した。理解の評価が高かった設問には、要点に関する情報を問う質問が含まれており、よく読めていた読み手は、要点の理解を軸に詳細部分を整理し、正しい理解が進んでいた。また、要点を問う問題に加え、話の流れを把握するような設問も理解の整理に有効であることも示された。一方、要点に関わる情報が設問で問われていない場合、要点以外の情報として問われていたインパクトのある情報が記憶に残り、それに引きずられることで文章の要旨から外れた理解を引き起こすことが示唆された。

また、理解が進まなかった読み手は、要点よりも文章中のエピソードなど詳細部分に理解が偏ることが示された。したがって、読解不振の読み手には、要点を中心とした内容を問う設問を与えることが理解への足がかりになると思われる。

第 6 章と第 7 章では、設問タイプの違いにより読解中の処理過程にどのような特徴があらわれるかを検証した。

第 6 章では、発話データから抽出された読解ストラテジーを量的に分析することで、その特徴を調べた。読解中に使用するストラテジーの使用傾向は、設問のタイプの違いに影響し、上位カテゴリではテキストベースを作る処理が影響していた。局所的な理解を求める設問（A タイプ）を与えられた場合では、他の広範囲の理解を求める設問（B・C タイプ）を与えられる場合と比べ、テキストベースの処理が相対的に低くなり、活性化されていなかった。下位カテゴリのストラテジーでは、自分の理解をテキストベースで表明するストラテジー（解釈・説明）と、既に読んだ情報を統合し再構成するストラテジー（情報の再構成）が影響していた。「解釈・説明」ストラテジーは、A タイプよりも B・C タイプで活性化しており、「情報の再構成」ストラテジーでは、A タイプよりも C タイプで活性化した。段落を超えるような理解や、文章全体の広範囲の理解を求める設問を与えられた際にこの 2 つのストラテジーが機能することが示された。

理解を表明できることは、つまり理解が進んでいることを示しており、テキストベースでの理解を軸として、高次の理解処理に発展する可能性がある。また、理解した情報を再構成できることは、情報同士を統合し内容を整理させることで、文章のマクロ構造理解へとつなげさせる効果を持つと思われる。

第 7 章では、第 5 章で用いた評価の得点結果にもとづき、学習者を上位、中上位、中下位、下位に分け、上位者と下位者の読解中のストラテジー使用の特徴を量的に調べたのち、それぞれの読みの過程を質的に分析した。ストラテジー使用の特徴として、上位者は下位者に比べ、高次のストラテジーを使用していることが明らかになった。具体的には、前に読んだ情報を現在読んでいる情報に結びつけながら読む（先行文脈とのつながり）、内容について疑問を持ちながら読む（内容に関する疑問）ことが特徴として示された。上位者は、高次のストラテジーを使用し、文章中の情報を統合しながら読むことで、文章全体の意味を形成しているのだと思われる。また、内容に疑問を持ちながら読むことから、文章に能動的に向かい合い、理解を深めていることがうかがえる。一方、下位者は上位者に比べ、設問で問われている内容を意識しながら読む（設問への意識）特徴があることが明らかになった。これ

は、設問に関わる箇所には意識が向くが、それ以外は理解に向き合おうとしていない可能性を示す。そして、設問を意識することから、設問によって読み方や理解が左右されることが考えられる。

続いて、上位・下位 3 名ずつの読みの過程を質的に分析した。下位者は、2 つの課題文の評価結果が大きく異なる者 3 名を分析対象とした。上位者は、どの学習者も 2 つの課題文に大きな点数差はみられず、ストラテジーの出現数が大きく異なる 3 名を分析対象とした。その結果、上位者は設問タイプによる理解に影響を受けにくく、A タイプのような局所的な設問であっても、それに解答するだけでは促されない理解を補う形で、自らの読み方を変え調整ができていく様子が見られた。また、上位者は設問の要因よりも、背景知識や言語力といった読み手の要因が理解に影響していたが、多様なストラテジーを用いて解決ができている様子が観察された。一方、下位者の場合は過剰に設問を意識しながら文章を読んでおり、与えられる設問によって理解が左右されることが明らかになった。局所的な理解を問う A タイプの設問では、読み手の理解も局所的になり、また設問の答えに関わる箇所を中心に読むことにより読み飛ばしが発生し、その結果理解が進まなくなる様子が観察された。また C タイプのように広い範囲を問う設問では、文章全体の意味を構築しようと高次処理ストラテジーが働くものの、理解のポイントとなる箇所を把握できなくなり、理解が進まなくなっていた。下位の読み手は、いずれも段落間の情報を統合させるような B タイプの設問において、文意の理解を述べる「解釈・説明」ストラテジーが活性化されており、これに「先行文脈のつながり」や「内容の精緻化」などの高次処理ストラテジーが結びつくことによって記憶が強化され理解が深まっており、その結果、成績が高くなっていた。これらの結果から、特に読解がうまくいかない学習者には、段落間の情報を結びつけるような設問を与えることが、理解促進への橋渡しになることが示唆された。

以上の結果を総合すると、段落を超えた情報を統合させるような設問は、学習者の理解を促進させ、かつ要点や話の筋を追うような設問は正しい理解に導く効果をもつといえる。

4. 今後の課題

今後の課題として、①読み手の最終的な理解を判定する方法の妥当性、②過程的な理解と結果的な理解の関係、③設定した設問の非明示性という観点からの分析、④理解を促進させるために設問で何を問うか、の 4 点を挙げた。今後は、これらの課題に取り組むことで、文章理解における設問研究の精度を高めていきたい。